三山国王廟に関する歴史的考察

―広東省饒平県の鴻程大廟を中心に―

A Historical Examination of the San Shan Kings' Temple

― Focused on the Hong Cheng Grand Temple in Raoping County, Guangdong Province ―

蔡　　遠　杭 *

Yuanhang CAI

はじめに

三山国王信仰は、広東省揭陽市揭西県河婆鎮近郊の巾山、明山、独山の三つの山に宿る神々の総称である。明末清初より、三山国王信仰は海外へと広まり、中国の民間信仰としての重要な位置を占めてきた。現在、三山国王信仰は中国大陸の粤東地域の民間信仰として存在しているだけではなく、海外との文化交流の橋渡しとしての役割も果たしている。このため、双方の文化交流を結ぶ役目を担う場所は、おのずと三山国王信仰と密接に結びついている廟に置かれることとなる。

信仰と廟は密接な関係をもち、信者に神聖な空間を提供する役割がある。さらに、廟は信仰の物理的な空間にとどまらず、地域間の信者たちの交流やコミュニティ形成を促すことができ、そして信者個人の精神生活にとっても重要な要素となっている。それ故、筆者は三山国王信仰を研究する上で、現地調査は欠かせない一環と考える。現地を深く調査することにより、三山国王信仰の全貌を効果的に理解することができる。

これまでの三山国王廟に関する研究の多くは、台湾の学者がおこなってきた。簡瑛欣はマレーシアと台湾の三山国王廟における神像、神の神誕、祭典の面を比較し、地域によって族群の信仰に違いがあることを示唆した[1]。邱栄裕は宜蘭県の三山王国廟のフィールドワークにもとづく結果を通じて、当地における三山国王信仰の変容を解明した[2]。許嘉明は台湾学者である林美容の祭祀圏理論を用い、三山国王廟の祭祀を通じて、彰化県の客家族群・福佬族群[3]と三山国王信仰の関係を考察した[4]。劉錫弘は主に台湾本土の三山国王信仰を比較し、宜蘭県と彰化県両地の三山国王信仰の現状と信仰の共通点と相違点の発生原因を解明した[5]。

---

* さい　えんこう　国際文化研究科国際文化専攻博士後期課程
指導教員：金縄　初美

1 簡瑛欣2010「馬来西亜与中国台湾三山国王廟的比較研究」『広西民族大学学報』第32巻第 3 期 p.23-32

2 邱栄裕2008「論述客家“三山国王”民間信仰之変遷―以台湾宜蘭地区為例」『贛南師範范学院学報』第 2 期 p.9-13

3 閩南と福佬語に近い潮州語を話す人を指す。

4 許嘉明1973「彰化平原福佬的地域組織」『中央研究院民族学研究所集刊』第36期 p.165-190

5 劉錫弘2014「宜蘭彰化三山国王信仰之比較研究」国立台南大学台湾文化研究所　修士論文

一方、潮汕地域の三山国王廟に関する研究は、陳春声の「社神崇拝与社区地城関係—樟林三山国王的研究」のみである。陳春声は広東省汕頭市澄海区樟林郷の各廟で行ったフィールドワークを通じ、三山国王廟はこの地域の社廟として普遍的に存在していることから、三山国王信仰は社神崇拝であると提唱した[6]。しかし、これまでの研究では各廟の内部の神像や廟全体の建築、関連する儀礼の形成原因などについての具体的な分析は行われていない。したがって、筆者は今後台湾と中国大陸の三山国王信仰の対比研究を準備するため、三山国王信仰の誕生地である潮汕地域の鴻程大廟に最初に取り組んだ。

鴻程大廟は台湾の三山国王廟において多く存在する分霊[7]廟の祖廟である。1980年代、中国大陸と台湾の関係が緩和され、これらの三山国王の分霊廟の信者たちは大陸にある起源廟と頻繁に文化交流をするようになった。2001年台湾からの進香団体は饒平県の鴻程大廟を訪れ、「福佑両岸」と「澤被蓬瀛」という両岸友好を象徴する扁額を贈り、香油代も寄付した。さらに、2004年と2011年に、台湾の雲林県斗南太興宮と宜蘭県大興振安宮からの信者たちが、それぞれ「神威顕赫」と書かれた２枚の錦旗と「神威顕赫」と刻まれた匾額を鴻程大廟に贈った。現在、鴻程大廟は海外の華僑や華人の間で、彼らと中国本土の文化を結びつける絆として機能している。この廟が台湾との関係が非常に密接であるため、筆者は多くの三山国王廟の中から鴻程大廟を研究対象として選んだ。

実地調査については以下の通りである。筆者は2023年７月に饒平県大埕鎮程南村の鴻程大廟を実地調査し、廟の日常祭祀を担当する地元の３人の長老[8]と、その廟の歴史、神像の由来、建築形式、毎年行われる儀礼の種類及び参加者の分布についてインタビューを行った。その過程で、筆者は鴻程大廟の建築様式、廟内の神々の配置、儀礼など、台湾とは明らかに異なることを発見した[9]。これらの相違点は恐らく地元の歴史や人々長年の考え方に関係があると考える。

そこで、本論文はフィールドワークの調査結果と文献資料を基礎にして、鴻程大廟に関する廟内の形式、三山国王の従属神、儀礼などの形成の原因を解明していきたい。

「福佑両岸」扁額
（2023年７月26日、筆者撮影）

6 陳春声1994「社神崇拝与社区地城関係—樟林三山国王的研究」『中山大学史学集刊・第二輯』広東人民出版社 p.90-106

7 分霊とは、廟の香炉から神の霊を象徴する線香の灰を取り出し、別の場所で祭る行為を指す。この線香の灰を祭る新たな場所に建てられた廟を分霊廟と称する。台湾の民間信仰において、分霊された神々は時に自らの起源となる廟（一般に「祖廟」と呼ばれる）に戻り、神の力を高めるための祭祀大典の儀礼に参加する必要があり、これを「謁祖」と呼んでいる。

8 Ｃ氏（69歳）、現在地元のＣ氏の氏族で最も高い発言権を持ち、地元の「Ｃ氏祠堂」の主要な管理者である。Ｃ氏（72歳）は鴻程大廟の７人の管理者の一人で、廟のすべての事務を担当している。Ｊ氏（64歳）、同じ鴻程大廟の７人の管理者の一人で、廟でのおみくじの解釈や信者が平安符を求めるのを手助けする事務を担当している。

9 陳中道生2019『台湾三山国王廟全集』長住久安国際有限公司

第１章　鴻程大廟の概況

１．１　鴻程大廟の自然地理環境

鴻程大廟は饒平県大埕鎮に位置している。大埕鎮はかつて所城鎮に属していた地域で、饒平県の南東部にある。この地域は北東部で福建省の詔安県と接し、南は南海に面し、南澳県と海を隔てている。西側は所城鎮と隣接し、陸上面積は31.95平方キロメートルで、人口は31,940人である。大埕鎮は、海抜562メートルの大幕山（または大泊山ともいう）を背に持ち、その面積は約20平方キロメートルに及ぶ。鎮の前には大埕湾が広がり、海岸線は7.8キロメートルに達する。この湾は北東側で福建省の詔安へと続き、東側は海沿い、西側は柘林湾へ通じている。古来より多くの漁船がこの地で行き交っており、海上交通が便利である。この地は北回帰線の北側に位置し、亜熱帯の海洋性季節風気候に属している。年平均気温は21.6℃、１月の平均気温は13.7℃、７月の平均気温は28.2℃で、極端な気温は最低0.5℃から最高39℃まで変動する。日照時間は2143.9時間、霜の降りない期間は349日である。また、年間の平均降水量は1499.8ミリメートルに達する。饒平県内の気候は冬が存在せず、春と秋が半年、夏が半年を占めている[10]。また、災害については、『饒平県志 - 巻十三災祥』によれば、県内で最も頻繁に発生する自然災害は、古代では台風や干ばつなどが主であり、他に地震、虫害、赤潮などの災害もあった[11]。現代でも、台風や地震が主要な自然災害である。1979年から2005年の27年間で、影響を及ぼす台風が68回発生し、年平均で２．５回の頻度であった。また、饒平県の地質構造の複雑さから、県内の黄岡河断層帯と、中国大陸の南で最も活発な地震帯である泉汕断層帯が交差しており、これが原因で饒平県では過去に多くの大地震が発生している。1600年と1918年には、南澳島で震度7.0と7.3級の地震が発生し、饒平県にも影響を及ぼし、大きな被害をもたらした。1970年から2005年の間には、饒平県の地震計器で地震が141回記録されている[12]。このような自然災害のため、古代の人々はこれらの災害を神の罰とみなし、三山国王、雷公や電母などの自然に関する神々を崇拝してきた。

１．２　鴻程大廟の文化的概況

饒平地域は明代の成化十三年（1477年）に県として置かれた。新石器時代からこの地には人類の活動があった。商の時、中原と粤東地域の文化が初めて融合し、「浮濱文化」という文化が形成された。唐の初期、岭南行軍総管[13]の陳元光が「南詔の乱」を平定し、それ以後中原の文化がこの地にもたらされ、饒平地域はこの機によって、徐々に開化された。また、饒平は古代の中原から南へ移住した漢民族が閩東を経て広東に初めて足を踏み入れた場所で、「粤首第一県」とも称される。このように中原文化と地方の文化が融合することで、饒平の文化的背景は非常に豊かとなった。県が設置された後、大埕鎮には多くの才能を持つ者たちが現れ、古代の科挙で成功を収め、文化が栄え、「海濱鄒魯（海辺に文化が繁栄している場所）」とも呼ばれるようになった。明の万歴の「東里志」、清の乾隆の「潮州府志」、そして光緒の「饒平県志」の記録によると、大埕鎮は明代に進士[14] ５人、挙人[15] 20人、貢生[16] 24人を出し、その中で19人が知県[17]以上

---

[10] 饒平県地方志篇纂委員会2010『饒平県志（1979～2005）』広東人民出版社 p.104-107

[11] 劉忭1883「饒平県志 - 巻十三災祥」劉忭原本、恵登甲、黄德容、翁荃増篇『広東府県志輯』上海書店・巴蜀書社・江蘇古籍出版社 p.254~263

[12] 饒平県地方志篇纂委員会2010『饒平県志（1979～2005）』広東人民出版社 p.112-115

[13] 戦争の時、軍事の最高指揮官である。

[14] 中国古代における文官の科挙試験の合格者である。

[15] 中国明清時期における地方試験である郷試に合格した者である。

[16] 明清時代には、各府・州・県の「秀才」の中で成績が優れ、首都の国子監で学ぶ資格を得た人々を「貢生」と呼んでいた。

[17] 県の長官である。

の役職に就いた。清代にも武進士[18] １人、武挙人[19] １人、貢生11人がおり、３人が知県以上の役職に就いた。その中、明の監察御史[20]である張存誠と蘇信、湖広布政使[21]である陳天資、礼部尚書[22]である黄錦など、多くの名士がこの地から出た。そのため、当時では「欲知朝内事、須問東里人（朝廷内のことを知りたいならば、東里の人に聞くしかない）」という諺が残っている。さらに、大埕鎮には多くの文化遺産が残されている。宋代に建てられた鴻程大廟は壮大で、毎年多くの海外からの華僑や華人が訪れる。そして、廟の内外には多くの歴史的文物も収められている。他にも黄尚書公館、雲峰院や、陳、黄、唐、周といった姓氏の祠堂や宗祠などの古建築が残っている。また、伝統文化の面では、大埕鎮は唐代から正式に中原の文化を受け、そして自身の文化と融合し、潮劇や潮楽、紙影戯、遊神祭りなど、特色ある文化活動が生まれた。そのため、三山国王信仰は、この地域特有の自然環境や文化背景の中で誕生し、時代を超えて香火が絶えず、現代にも地域の人々の生活と密接に結びついている。

１．３　鴻程大廟の歴史的概況

鴻程大廟は宋代に建立され、地理的に南海海域に隣接し、その背後には倚幕山という自然の背景を持つことが特徴的である。具体的には、この廟は饒平県大埕鎮に属する程南村の南東方向に所在し、その総敷地面積は約3,500平方メートル、主要建築部分の面積は700平方メートルに及ぶ。この廟の建築スタイルは、三進[23]の間取りと２つの空き地を備えた潮汕の伝統的な四合院を基盤とし、梁の構造は四柱による擡梁式[24]と穿斗式[25]の技法が組み合わされている。屋根部分には橙黄色の琉璃瓦を使用し、両側には緑色の琉璃瓦とともに、多彩な瓦製の武将の人形が装飾として施されている。また、入口の前方には高さ１メートルの石の太鼓が配置され、廟の東側には、数百年の歴史を持つこの廟の歴史を静かに見守る巨大な古榕[26]の木が存在している。

鴻程大廟は700年以上の歴史を持ち、経年劣化のために何度も修復が行われてきた。現存する再建に関する唯一の記録は『東里志』にあり、それによれば「正徳庚午、郷後生周廣德、湯仕顕等二十人、相卒勧縁、庀材鳩工、撤而新之[27]（明の正徳庚午年間、村の若者である周広徳、湯仕顕など20人は互いに励まし、自分たちが職人を集め、建築材料を収集し、鴻程大廟を再建した）」（筆者訳）。これにより、鴻程大廟の再建の記録は明代の正徳庚午年（1510年）にまで遡ることができる。そして、筆者の現地調査によれば、現在鴻程大廟の内部の構造は、1512年の再建後の構造に従っている。この点についての詳細は次章で論じる。

また、鴻程大廟はかつて元朝に抵抗した遺跡の一つである。『東里志』によると、「宋帝昺祥兴元年秋八

---

[18] 中国古代における武官の科挙試験の合格者である。

[19] 挙人の試験と同じ郷試に合格した者である。

[20] 中国の官名で、官吏の功過や一般政務の可否を取り調べ、地方を巡行して行政の監視に任ずるものである。

[21] 湖北省と湖南省両地で行政・財政を司った地方長官である。

[22] 礼部尚書とは、宮廷内の礼儀、祭祀、宴会、学校、科挙及び外交活動を主管する大臣である。

[23]「口」という字形をした庭院は一進の院と呼ばれ、「日」という字形をした庭院は二進の院、「目」という字形をした庭院は三進の院と呼ばれている。一般的に、大きな屋敷では、最初の進は門屋、二番目の進は広間、最後の三番目の進は女性の部屋であり、女性の活動空間となっている。

[24] 擡梁式とは、中国古代の漢民族の建築における主要な木構造の形態であり、柱の上に梁を架け、その梁の上にさらに梁を抬げる方式である。

[25] 穿斗式とは中国古代の木造建築の形式の一つであり、こういう構造は直接に柱で桁を支えることで、はりがない。

[26] 古榕（ガジュマル）の寿命はほとんど数百年に達し、潮汕地域では、「大木は神となり」という民間の伝説があるため、人々の心の中ではガジュマルは神のような存在とされている。そのため、多くの古い建築物（祠、廟など）の前にはこのような大きなガジュマルが残っている。

[27] 陳天資2001『東里志（巻五）』饒平県地方志篇纂委員会弁公室 p.201

月、斧頭老[28]起兵勤王。大埕郷豪斧頭老等、選集精鋭、会于三山国王廟、将赴募潮阳、殺异議者、遂整众行[29]（1278年の秋の８月、斧頭老は宋の皇帝である趙昺のために忠義を尽くし、兵を起こした。大埕郷の豪族、斧頭老らは精鋭の兵士を集め、三山国王廟で集まり、隊列の中で異議を唱える者がもしも現れれば、直ちにその場で処刑する。その後、潮陽県へと急行することとなった）」（筆者訳）と記されている。さらに、明代に社学の大館としての役割も果たしており、当時の地方政府が人材を養成する場所であった。『東里志』には、「東里以三山国王廟為大館、請郷賢陳括斎、陳和斎為師、毎以朔望考課、次日習礼習射。当時文教翕然兴起[30]（東里鎮は三山国王廟を学校として、郷の賢人である陳括斎と陳和斎を教師として招き、新月と満月の日に試験を行い、翌日は礼儀や射撃の練習をした。当時、文化教育の風潮は盛んになった）」（筆者訳）と記されている。

そして、現在の鴻程大廟には多くの貴重な歴史的文物が保存されている。宋代の大石柱が残っており、その石柱には「明巾独三山救主、孟仲季一体封王（明巾独の三山神、帝を救い給う。故に三兄弟、揃って王の封を賜わる）」、「護国庇民能万古、助唐興宋鎮三山（国を護り民を庇いて、万古に流伝す。唐を助け宋を興し、三山を鎮守せん）」などの儒家の忠君愛国の思想を体現する詩が彫られている。また、明代の石の額縁には「東方保障」と彫られており、明代の万暦時代の陝西の監察御史である蘇信が廟のために作った99首の神籤の詩、明の両広総督及び監察院である周公が書かれている「濩地功深」の木板、明の嘉靖14年（1535年）湖広布政使である陳天資の「世授神庇」や蘇信の「三山神祠」の木の額縁などがあり、非常に貴重な歴史的・芸術的価値がある。そのため、1988年10月、鴻程大廟は饒平県人民政府により県の主要な文化遺産として指定された。また、県政府は「大廟」の保護グループを設立され、廟の保護と管理の仕事を専門に行っている。現在の鴻程大廟の整体の形は、かつての記録に基づいてそのままの形で再現されており、地域の有名な観光スポットとなっている。

2001年以降、香港、マカオ、台湾から中国海内外の信者が絶えず訪れ、一時的に観光や参拝のブームとなっている。しかし、近年、中国大陸と台湾の関係が次第に悪化してきたため、台湾からの信者の数が大幅に減少している。

鴻程大廟の正面図（2023年７月26日、筆者撮影）

[28] 地元の長老たちとの会話から、「斧頭老」と呼ばれる人物が陳を姓する。南宋末期の時、斧頭老はこの地域の豪族であり、声望がとても高く、斧の使い手としての腕前から「斧頭老」と名付けられた。

[29] 陳天資2001『東里志（巻二）』饒平県地方志篇纂委員会弁公室 p.48-49

[30] 陳天資2001『東里志（巻三）』饒平県地方志篇纂委員会弁公室 p.82

多彩な瓦製の武将の人形
（2023年７月26日、筆者撮影）

１．４　鴻程大廟の廟内の構造と神々の種類

鴻程大廟の廟内の構造に関して、前庁、中庁、そして後庁という三つの区分けが明確になっている。前庁の後と後庁の前には、それぞれの空き地が存在し、それは「廊廡」と呼ばれている。『東里志』によると、「正堂及前門庁事、凡若干楹、俱結構已成、而覆瓦尚薄、牆垣猶圮、後堂未建、不足以揭虔妥靈、有歳壬申、通判岳公朝重、致政歸、洎郷老周公伯恩、湯公元惠等、凡二十八人、複相卒勸縁、規劃有方、正堂及前門庁事、則加以灰瓦、後堂兩廡、則重新之、與夫牆垣甍坂、欄楹門窗之類、悉次第畢舉、而又加以丹垩填塗、未逾年告成、煥然一新、規模雄壮、視昔有加焉。夫古者帝王受命、顯穹為神人主、既設官分職、擇天下賢能、以惠綏吾民、俾各有寧又望秩百神、崇明祀以佐人所不及[31]（正堂および前門の間は既に基本的な構造を完成させ、数本の柱が立てられたが、瓦はまだ完全に敷かれておらず、壁も部分的に破損している。後堂の建設はまだ始まっておらず、神々を祭るには不十分である。1512年に、漳州の通判[32]としての地位を持つ岳朝重（大埕出身）は、退職の年齢に達し、大政を皇帝に奉還し、故郷に戻った。その後、岳朝重が主導し、地元の長老、周伯恩や湯元惠を含む合計28名を動員し、資金を共同で集め、大廟の修復計画を策定した。それにより、正堂および前門の間の屋根に瓦を追加し、後堂の両側は再建された。壁、手すり、門、窓なども修理され、建物全体が塗装された。１年も経たないうちに、その建物は新しい姿に生まれ変わり、その規模と壮観さは、以前と比べて劣るところがない。古代の帝王は天命によって統治し、天と地の間の接点としての役割を果たしていた。帝王は多くの官職を設立し、国中から有能な者を選出し、それは百姓の治理と配慮を向上させるためであり、その結果、百姓は安定した生活を営むことができた。このため、地域の人々は数多くの神々を崇敬する祭りを行い、廟内も神々の種類を補完した)」（筆者訳）。以上の史料から見ると、大廟の前庁、正殿、後庁の基本的構造はすでに1512年の時に完成していた。また、神像の種類について、文の最後も記されている。三山国王は帝王であることで、自分を補佐する大臣の存在も必要である。このため、文章の最後に述べられているように、官職を設立し、国内から有能な人材を選び出し自分の臣下となり、民の管理を助けることになった。

また、現在廟内の神々の種類と配置について、廟の入り口を通り正殿の廊廡に至ると、左右の側殿には高さ約４メートルの座る姿の神像や儀仗用の武器が並んでいる。入り口の左側から順に、「真人爺公」、「電

[31] 陳天資2001『東里志（巻五）』饒平県地方志篇纂委員会弁公室 p.201-202
[32] 明清時代に漳州地域の穀物輸送や農地の水利事業などを担当した官吏である。

母娘娘」[33]、「儀仗兵器」、「大使爺公」が配されている。右側からは、「速報爺公」、「雷公爺公」、「儀仗兵器」、そして「二使爺公」が配置されている。大使と二使は高い帽子を被り、広い衣装を着て、落ち着いた様子を見せている；雷公は青い顔と鋭い歯を持ち、鶏の口と爪、一対の翼があり、太鼓を踏み、左手に巨大な鉄釘を持ち、右手に斧を挙げて、まるで邪悪を斬りつけるような姿である；対応する電母は宝珠を手に持っており、地元の長老たちの話によれば、電母娘娘がこの宝珠を空に振ると、強烈な光が現れ、それが稲妻と言われている；速報爺公は、顔が漆黒で鍋の底のように見え、目を大きく見開いている。左手を腰に当て、右手は人差し指と中指を前方に伸ばし、邪悪を叱責するかのような厳格な表情である；その向かいにいる真人爺公は、北宋時代の著名な医者であり、宋の仁宗の時代に皇太后を治療し、死後、朝廷から「大道真人」と「保生大帝」として封号を受けた。明代には、明の成祖から「万寿無極保生大帝」という称号を授けられ、人間から神に昇格した神である。彼は巻物を手に持ち、厳格で真面目な表情をしている；これらの神像は、互いに向かい合って配置されており、その間には様々な儀仗兵器が並んでいる。

正殿に入ると、まず目に入るのは正殿の中心に位置する約６メートルの高さの三山国王の神像三体である。中央に位置するのは大国王、左右には三国王と二国王が並び、彼らの顔は常に威厳と神々しい姿勢を放っている。正殿の中央にあるこれらの神像の背後には彩色で描かれた三山国王の画像がある。神像の前には、各国王の足元に大きな神輿が一つずつ置かれ、その中には赤い衣装を身に纏い、玉の帯を腰に巻いた軟木の彫像が異なる姿で座っている。そして、神像の横には、２人の侍従が恭しく立っている。左側の侍従は巻物を握り、右側の侍従は印綬を持っている。通常の日には、これらの３台の神輿は赤い布で覆われ、６メートルの高さの三山国王の神像はカーテンによって部分的に隠されている。また、正殿の前方には、村民が祈願のためのテーブルが設置され、上には広東の巡察使である王来任と二広の総督である周有徳の長生牌が置かれている。さらに、テーブルの左右には、それぞれ五谷神[34]と獅子爺を代表する神像が一体ずつ置かれている。そして、これらの木彫像の最も右端には、四色の旗が高く掲げられている。正殿の内部の最も左側と右側には、それぞれ「後羿神」[35]と「三官人爺」の神像が安置されている。後羿神は背に弓と矢を持ち、２人の従者が側に立っており、正殿の安全を守っている。三官人爺は三山国王の秘書として、普段は神輿の中に座っており、常に外出して巡回する準備ができているかのようだ。また、正殿の左右の偏殿には、各々３体の神像が展示されている。左側は「崇龍爺公」、「崇政爺公」、「崇伯爺公」、右側は「木輝爺公」、「木星爺公」、「木虎爺公」である。これらの６体の神像の中で、中央に位置する崇政爺公と木星爺公だけが右手に巻物を持ち、左手に筆を持っており、何かを記録する準備ができているように見える。残りの４体の神像は穏やかな表情を持ち、古代の朝廷で皇帝に対して用いられた笏板を手にしている。これらの６体の神像は、２体ずつ対になっており、全てが文官のような服装を纏っている。

後殿の廊廡に足を踏み入れると、左右両側には神龕が設置され、それぞれ特定の神々への奉納がなされている。右側の神龕には、両体の観音菩薩の仏像が奉納されており、その中には一体が「千手観音」で、手には各種の武器を持っている。もう一体は経巻を手に持つ観音像である。これに対面するのは「太子爺」の神龕である。神龕全体が小型の廟のような構造を持ち、中にある神像は赤い腹巻きを着た子供の姿をしており、中国神話中の「哪吒三太子」[36]を奉っている。次には「注生娘娘」の神像があり、その顔は慈悲深

[33] 電母娘娘は、稲妻を統御する神として知られている。雷公は陰陽の陽の属性を持つ雷の神で、公として称される。一方、電母は陰の属性を持つ雷電の神で、そのため母と称される。または「金光聖母」や「朱佩娘」とも呼ばれる。

[34] 五谷神、または五谷母とも称され、農業を司る神である。潮汕地域の人々は、五谷神を「五谷娘」や「五谷母」と呼んでいる。

[35] 羿、通称「後羿」として知られる、卓越した射箭の技術により、かつて９つの太陽を撃ち落とし、ただ１つの太陽のみを人間の世界に残したと伝えられている。中国古代の神話や伝説における主要な人物である。

[36] 哪吒は民俗信仰において「太子爺」として称される。道教では「中壇元帥」として任命され、五営神将の一つに属し、また仏道儒三家が共に尊ぶ降魔の天神でもある。托塔天王李靖の第三子であるため、「三太子」と呼ばれる。

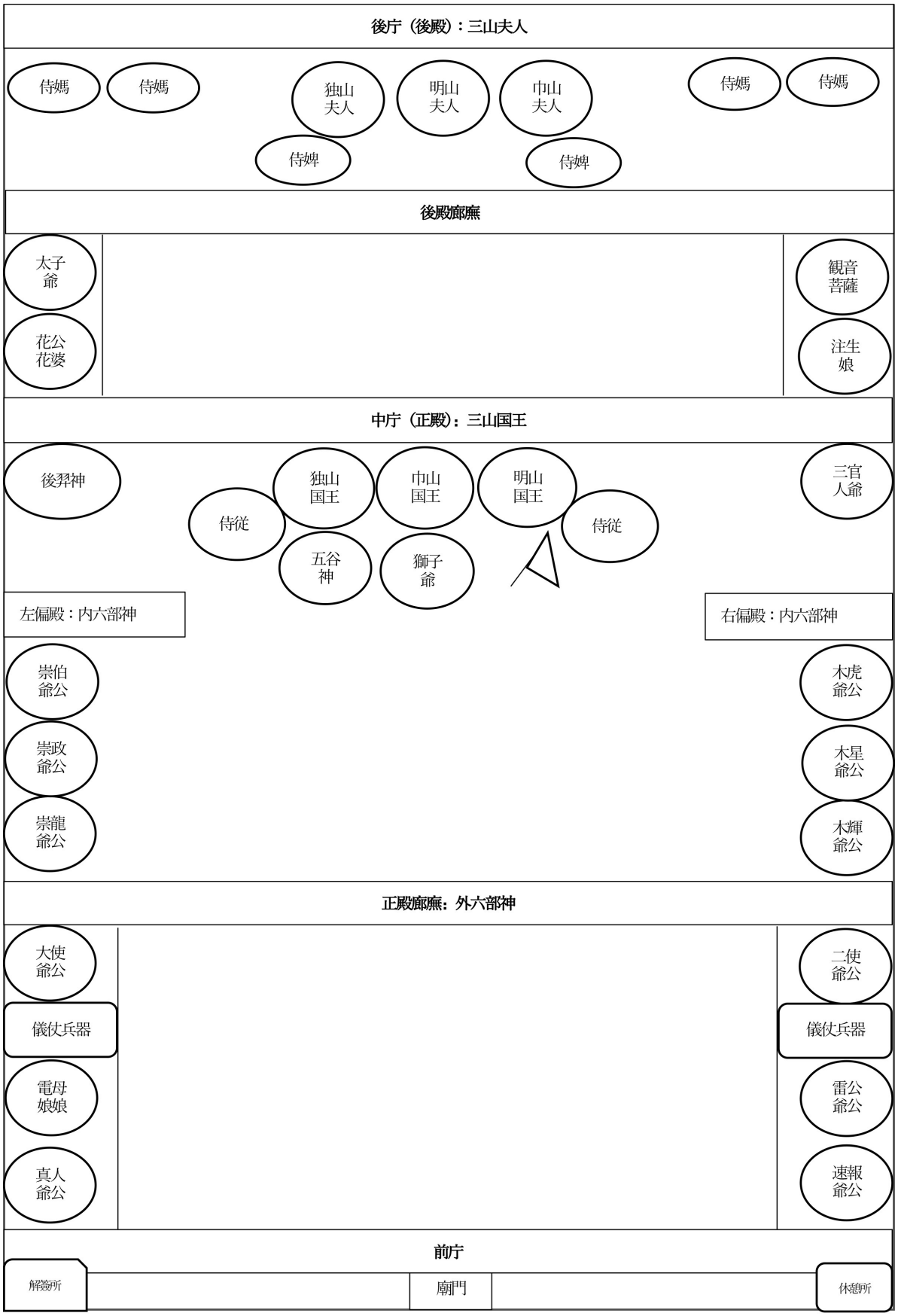

表１：鴻程大廟の構造図（９月13日、筆者作成）

い表情をしている。神像のそばには「金童」と「玉女」の二体の童子像がある。地元の人々によれば、不妊の女性がここで祈りを捧げると、注生娘娘の祝福を受け、子供を授かることができると言われている。最後は「花公」と「花婆」の神像で、二人とも老人の姿をしており、それぞれが子供たちを抱え、子供たちを専門に見守り、保護する神々だと言われている。次には廟全体の最後の部分である。後殿には三山国王の夫人たちが祭られており、その中で「明山夫人」の像が後殿の中央位置に位置している。一方、「独山夫人」と「巾山夫人」はそれぞれ左右に居る。三体の木彫像はすべて各自の神輿の中に静かに座っており、どれも同じ慈しみ深い顔立ちと、端正で堂々とした容姿を持つ、それが人々に畏敬の念を抱かせる。夫人たちの左右には、それぞれに粧鏡と化粧箱を持つ「侍婢」が二人立っている。そして、後殿の左右の側殿には、それぞれ四体の「侍媽」[37]という女神が祭られており、これらの神像の前のテーブルには、それぞれ粧鏡が置かれており、神々が顔作りのために使用する。

また、実地調査から得られた資料以外、村の長老たちは廟の神々の種類についても説明していた。村の長老であるC氏（72歳）によると「廟内の各種神像の種類は昔と同様に受け継がれてきたが、年代が古いので神々の本名はすでに忘れ去られていました。だから、村民たちは神々を彼らの官職の名で呼んでいます。しかし、現在廟にある神像は昔からのものではなく、改革開放後に海外の信者たちが寄付して再び造形されたものです」[38]という。

したがって、以上の史料と筆者の実地調査に基づき、現在の鴻程大廟の外部構造や神々の種類は、明代の記録の通りほぼ変わらずに維持していることが確認された。そして、廟内での三山国王と他の神々、仏様などの共同祭祀の状況から、地元の人々が歴史上の忠臣に関する民間信仰、道教、仏教を高い包容性で受け入れていることと各信仰の融合の痕跡が見られる。さらに、廟内の様々な神々の職能から見ると、地元の人々が神々に対する一種の実利的な心理を持っていることが示される。つまり、当地の人にとって用があれば、供奉し参拝するというものである。

第２章　鴻程大廟の儀礼形式

２．１　鴻程大廟の儀礼

三山国王信仰は潮汕地区における長い歴史を有し、広範囲な信仰を受けているため、祭祀儀礼も非常に盛大となっている。鴻程大廟の儀礼は通常、旧暦の正月から始まる。正月の一日には「求籤」[39]の儀礼が行われる。大埕郷の四つの社区から、道徳心が高く評価され、子孫が多い長老を選び、全郷の人々を神殿前で代表しておみくじ筒を振り、三山国王におみくじを授けてもらい、その郷の一年間の運勢を予知するための準備を行う。おみくじの種類は10種類以上あり、「合郷平安籤」や「早冬収成籤」、「晩冬収成籤」、「海利籤」、「副業籤」、「功名籤」、「六畜籤」、「塩田籤」、「商業籤」、「外出籤」のほか、近年では現代人の願いに適した「工業籤」、「行車籤」、「養殖籤」などが加えられた。おみくじを引いた後には、「杯珓」を投げ、そのおみくじが神から授かったものかどうかを確認する必要がある。もし「杯珓」[40]の形が陰と陽の組み合わせである場合、選んだおみくじが神から授かったものであることが示される。

正月の四日の夜には、地元の人々が三山国王の天上からの帰還を迎えるため、廟祝とその年の主事となる社区が神殿前で奉納品を用意し、祈りを捧げなければならない。これは三山国王が前年の旧暦12月24日に天に昇り、玉皇大帝へ報告を完了した後の帰還を歓迎する意を示すもので、三山国王への歓迎とおもて

[37] 侍媽（スマ）、三山国王の嬪妃である。古代の帝王の姫妾に非常に似ており、皇后に次ぐ地位に位置づけられる。
[38] 2023年７月26日に実地調査を実施した。
[39] 籤を引くこと。
[40] 杯珓とは、卜占に用いる道具である。平らな面は陽、丸まった凸面は陰を表わす。

なしを表現する。その後の数日間で、盛大な「巡郷儀礼」[41]が行われる。儀礼の前には、再度「杯珓」の儀礼を行い、三山国王の巡郷の時期を問いただす必要がある。

毎年の正月八日前後、程南村の村民たちは杯珓の結果を基に巡郷儀礼を開催する。儀礼開始の一ヶ月前には、村の長老が周知し、必要な資金を集め、巡郷の隊列の用品を調達しなければならない。そして、さまざまな隊列を組織し、儀礼の準備と練習を行う。巡郷の隊列は、手始めとして「洗花路」と呼ばれる行列が行われる。この際、先頭の長老が右手に紅花と仙草を付けた枝、左手に水が入った小さいバケツを持ち、道路に水を撒く儀礼を行う。これに続き、６名から成る標語旗隊が後に続く。彼らは３つの標語旗を持ち、それぞれ「程南郷大鑼鼓隊」、「恭迎聖駕」、「合境平安」と記されている。次は彩旗隊と標旗隊が後を続く。彩旗隊は村の少年たちが古代の戦士の衣装を着て、各自が一本の旗を持ちながら構成される。かつて標旗隊は村の未婚女性だけが旗を担ぐことができたが、現在は男の子も参加できるようになっている。標旗隊の後には、厳粛な言葉が記された看板を掲げた「挙牌隊」と、三山国王の神器を持つ８人の子供たちからなる「武器隊」が続く。その後、祭りの核となる「神輿隊」が現れる。この隊列は４つの神輿で構成されており、獅子爺の神輿が先頭に立ち、三山国王の神炉、三官人爺、五谷神の神輿がそれに続く。程南村では、三山国王の像が巡視せず、三官人爺がその代わりとして毎年村の各地を巡視するのが慣わしとなっている。神輿を担ぐのは村の男性のみで、各神輿は２人で担がれる。さらに、地域によっては新たに子供が生まれた家庭の男性のみが神輿を担ぐ場合もある。これに続き、「長老隊」という、深紅の長い中国服と帽子を身につけた数名の老人たち[42]が続く。最後に、「扮景」と楽器隊が登場する。「扮景」は古代の兵士の服装をした少年４人と、官吏の衣装を身にまとった少男少女２人で構成されている。楽器隊は大太鼓を指揮者とし、笛や二胡、銅鑼などの楽器で演奏を行う。太鼓は経験豊かな村の長老が担当することが多い。管楽器は主に年配者が演奏し、銅鑼は村の子供たちが担当することが一般的である。全体の巡郷儀礼は二、三日間にわたり続行される。

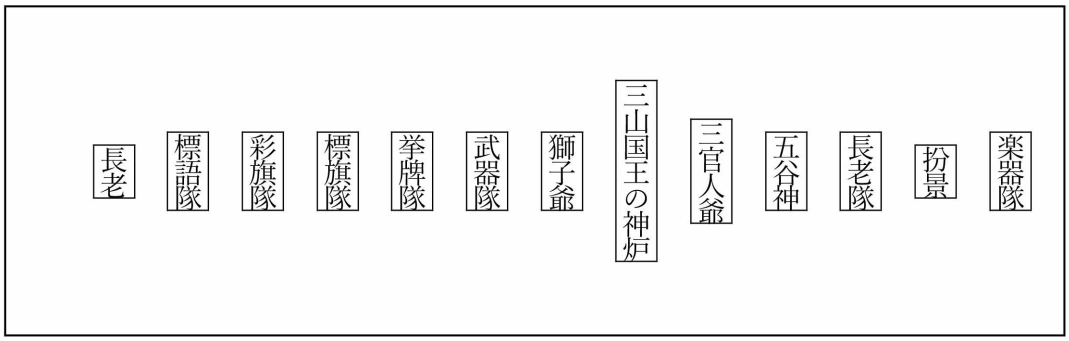

表２：巡郷儀礼の隊列構成（先頭は左から）（筆者作成）

そして正月十五日の元宵節に至ると、さらなる盛大な祭りが巡り来る。この日、村の村民たちは祭祀用の品々を準備し、廟での参拝に向かう。祭品は種類が豊富で、豚、ガチョウ、鶏や鴨、さまざまな海産物や米で作った製品が用意される。一見祭祀のように見えるが、実際は豊作の大規模な展示会である。また、三山国王への奉納として紙製の灯籠も用意され、元宵節の灯籠展示を三山国王にご覧いただく意を示す。

毎年旧暦の２月25日は三山国王の誕生日であり、この日は特別に盛大である。村人たちは贈り物や紙幣を持って廟で拝礼を行い、神の加護を祈願する。さらに、演劇団を廟に招き、これは三山国王が観覧するための表演とされている。加えて、毎年の旧暦の２月１日、３月３日、６月６日、および９月９日は三山国王の賛福日（三山国王を祝福する日）であり、これらの日々は通常よりもいくぶん賑やかになる。

[41] 神像を持ち運んで各村を巡回すること、明代の時から今日まで続いている民俗行事である。
[42] 彼らは祭りの主催者であり、村で最も尊敬される存在である。

第３章 廟内の構造と儀礼に関する解釈

３．１　儒教との関係

儒教文化は中国の伝統文化にとって言うまでもなく重要な存在である。漢の武帝が百家を罷黜し、儒教を独尊し始めて以来、中国は数年間にわたり儒教の文化の影響を受け続けている。その儒教文化の中では、「礼」という思想は核をなすものであり、「礼」の秩序はまさに儒教倫理の規範であると言える。この規範は、自然崇拝や祖先祭祀の儀礼、国家の各種制度といった最初の形態から、血縁関係と社会階層に基づく複雑な倫理システムへと徐々に発展してきた。儒教の三綱（すなわち、主君と臣下、父と子、夫と妻の関係）を軸に展開する人倫関係や社会活動のあらゆる領域で、この倫理規範は何世紀にもわたり深く根付き、封建社会の人々の行動や生活を長期に渡って規定してきた。「礼」の中で、最も顕著な特徴は、上位者と下位者の関係の遠近、身分の尊卑と貴賤の区別に関する明確で非常に厳格な社会人倫の秩序規範を有していることである。この思想は建築の分野においても例外なく影響を及ぼしている。『荀子』の中の「礼論編」には、礼に関する部分は以下の記述がある。

「礼者、以財物為用、以貴賤為文、以多少為异、以隆殺為要（礼なる者は、財物を以って用と為し、貴賤を以って文と為し、多少を以って異と為し、隆殺を以って要と為す）」[43]

つまり礼は、財物を用い、礼儀の文飾りで貴賤を区別し、礼儀の多寡によって差をつけ、尊貴または簡素な礼儀を要点とすることである。

また、『荀子』の「富国編」の中でも礼に関する部分の記載がある。

「古者先王分割而等异之也、故使或美或悪、或厚或薄、或佚或楽、或劬或労、非特以為淫泰夸麗之声、将以明仁之文、通仁之順也。故為之雕琢、刻鏤、黼黻、文章、使足以辨貴賤而已、不求其実観；為之鐘鼓、管磬、琴瑟、竽笙、使足以辨吉凶、合歓定合而已、不求其餘；為之宮室台榭、使足以避燥湿、养德、辨軽重而已、不求其外（古は先王分割してこれを等異す。ゆえにあるいは美あるいは悪、あるいは厚あるいは薄、あるいは逸楽、あるいは苦労せしむるは、ただにもって淫泰夸麗を為すにあらず。まさにもって仁の文を明らかにし、仁の順を通ぜんとするなり。ゆえにこれが雕琢刻鏤、黼黻文章を為すは、もって貴賤を弁ずるに足らしむるのみ、その観を求めず。これが鐘鼓管磬、琴瑟竽笙を為すは、もって吉凶を弁じ、歓楽を合わせ和を定むるに足らしむるのみ、その余を求めず。これが宮室台榭を為すは、もって燥湿を避け徳を養い軽重を弁ずるに足らしむるのみ、その外を求めず）」[44]。

つまり、すべての彫刻、装飾用の柄、各種の楽器の使用、建築芸術への取り扱いにおいて、最終的な目的は「貴賤をどう区別するか」にあり、「その外観の重要性」にあるのではないことがわかる。これにより、国家の上層から下層に至るまで、社会生活や家庭内部までもが「礼」の制約体系に組み込まれている。この影響は建築における外形的表現に明らかであり、人々の尊卑の階級は建築様式によって区別され、建築は「礼」を体現する重要な手段となり、封建的権力を示し、社会階層の秩序を維持するために用いられている。

そのため、政治の中心から遠ざかった饒平県も例外ではなく、鴻程大廟の建築様式や儀礼の細部において、地元の人々が儒教の伝統文化の影響を受けていることが見て取れる。三山国王という名前からも分かるように、通常の神々とは一線を画する存在であり、神であるとともに国王としての存在感を持つ。国王として、他の人々と異なる最初の点は、その住処である。

第２章で述べた通り、鴻程大廟は三部分に分かれており、それは古代の皇帝の宮殿を模した宮廷式の廟である。まず、皇宮の安全を保護する前庁、国家の政治を議論する正殿、そして後宮皇后と妃たちが居住

[43] 原文は方勇2015『荀子』中華書局 p.306による。現代語訳は森 秀樹訳1986『荀子下』学習研究社 p.73を引用。

[44] 原文は方勇2015『荀子』中華書局 p.142-143による。現代語訳は、杉本達夫訳1964『荀子』経営思潮研究会 p.107を引用。

する場所が特定されている。前庁には情報を提供する速報爺公が配置され、大使爺公と二使爺公は正殿の門前の安全を保護する正殿前の守護役を務める。正殿の左右偏殿には、古代の朝廷の中の六部[45]を模倣し、戸部、礼部、刑部、吏部、兵部、工部という六部の官員が配置される。また、正殿の安全を保護する後羿神や、国王の指令を遂行する三官人爺もいる。後宮の両側には、他の三山国王廟には見られない侍嫣という三山国王の妃たちが配置される。このような設計は、皇権を畏敬し模倣であるだけでなく、儒教の「礼」の遵守でもある。

中国の伝統的な建築群の配置は、中軸対称の形式を多用しており、例えば明清の故宮や北京の四合院などがそれにあたる。その源を辿ると、これは儒家の哲学思想と深い関わりがある。中国伝統の建築配置は、異なる機能を持つ独立した建築単位を院落を介して結びつける。各建築物は自立性を保持しつつ、機能に即した適正な位置に配される。このような配置は、古代中国における社会の安定を維持する礼教の原則と一致し、また、建築群が中軸対称で組織されることにより、「尊者が中に居る」という儒教の礼制が強調されている。伝統的な儒教の考え方では、厳格な礼儀を通じて社会の調和と安定を保持することができるとされている。これが、廟の構造が秩序と階層性を非常に重視している理由である。そのほか、廟内の多くの対句や扁額には、三山国王が唐と宋の皇帝を救ったとの記録があり、これらは儒教文化の「忠君愛国」という思想を反映している。

次は、三山国王の祖廟と異なる神々の座席の問題である。鴻程大廟においては、大国王が中央に位置し、二国王が右側に、最も若い弟である三国王が左側に位置する。なぜ鴻程大廟は祖廟の座席分布と異なり、大国王を中心位置に置くのか。その原因は儒教の中では兄弟関係における「礼」の規範を重んじ、兄弟間の尊卑の序列を強調する。年長者を尊び、年少者の身分は卑屈とされる。家庭において、長男は父母を補佐し、年少の兄弟の育成を支援すべきであり、両親が亡くなる事態となった場合、兄長は父母の役割を果たし、弟の養育の責任を担うべきである。『荀子』によれば、「長幼有序、則事業捷成而有所休（長幼に序有らば、すなわち、事業捷く成りて休う所有り）」[46]と主張している。また、このような序列は、儒教の伝統的な「孝悌」文化とも関わっている。「悌」の元の意味は、郷里の同族の年長者への尊敬であり、後には兄長への愛情を意味し、兄弟間の愛を代表するものとなった。これは家庭における「孝」文化の延長であり、家庭の重要な倫理的価値規範でもある。儒教が提唱する「兄友弟恭（兄は弟に兄弟としての愛情を尽くし、弟は兄を慎み敬う）という理念は「悌」の具体的な表現であり、兄が弟を保護し、弟が兄を尊重する。従って、大国王を中心に置くことも、儒教が推進する孝悌文化の一つの表現とも考えられる。

しかし、上述した通り鴻程大廟は外部から内部に至るまで、儒家の各種要素に極力近づこうとする最も重要な理由について、筆者は当時の「毀淫祠」[47]事件に関係があると考える。

明清時代の潮汕地域では、さまざまな神々に対する盲信と祭祀の盛んさが社会発展に悪影響を及ぼし、一年を通じて様々な祭りが絶え間なく行った。伝統的な農耕社会において、農業は生活の基盤であり、農繁期を逃すことは食糧不足のみならず、政府の税収減少にもつながり、国家秩序にも影響を及ぼした。さらに、神々を祀るたびには多くの家畜が祭祀用品となり、家畜を中心とした生産が大きく損なわれた。

正徳末年から嘉靖初年にかけて、広東提学副使である魏校が広東に赴き、大規模な「淫祠」の破壊と社学[48]の興行を行った。『荘渠遺書』によると、「各処廃額寺観及淫祠、有田非出僧道自創置也。皆由愚民舍施、遂使無父無君之人不耕而食、而延禍于無窮[49]（各地の廃除された神廟や寺院が占める畑は、もともと

[45] 中国、隋・唐代以降清代まで中央政府の行政事務を分担した六つの官署の総称である。

[46] 原文は方勇2015『荀子』中華書局 p.395による。現代語訳は、森 秀樹訳1986『荀子下』学習研究社 p.195を引用。

[47] 小島 毅1991「正祠と淫祠 – 福建の地方志における記述と論理」『東洋文化研究所紀要』p.169の中で、淫祠とは、全国の神祠のうち、民に対する功績がなく、祀典にも載っていないものを指している。

[48] 中国の郷村教化機関である。南宋の時期に起源し、明清時代に大いに発達した。

[49] 魏校1983「巻九諭民文」『荘渠遺書』商務印書館 p.59

道士や僧侶の所有ではなく、愚民が施しとして彼らに提供したものである、こうした不徳の士でも無から有を得て、誠に惨めなものだ)」(筆者訳)と記されている。

三山国王は宋と元の時に国家の祭祀対象として祀られていたが、明清の時、宋・元王朝の時代のように国家祭典に収録され、政府によって崇拝されることはなかったため、時に淫祠とみなされる可能性もあった。そのため、潮汕地域の士大夫と百姓は、三山国王を儒家の思想に近づけ、儒家文化に適合する神明として打ち出し、朝廷の「淫祠」から逃れるよう努力した。そして、外見を儒家文化に近づけるだけではなく、朝廷の儒家を代表する大臣らからの承認も不可欠である。陳理が記した『東里志』の「重建明貺三山国王廟記」や明の礼部尚書である盛端明が記した『明貺廟記』では、三山国王が隋と唐の時代から国と民を守る機能を強調し、民に功績があることを中央政府に理解させ、その功績と古来各時代の皇帝が認めた三山国王の存在の正統性を強調している。そのため、これは鴻程大廟が長年にわたり破損を受けた後、正徳末年に突如修復をし始め、儒教の文化に近づく重要な原因の一つと考えられる。

3.2　三山国王信仰と人々の皇権認識

三山国王信仰儀礼に関して、詳細な記録は民国時代の潮汕地域、特に河婆地区の「遊神」儀礼から見られる。他の地区の儀礼と比較し、河婆地区での三山国王信仰儀礼は独特である。潮汕地域は多くの地区では主神の神輿は必ず村の行列に従い、村を巡ることにする。しかし、河婆地区では、三山国王が主神であるにもかかわらず、直接村の巡査には参加せず、代わりに自分の部下「指揮大使」と「木坑公王」という神が出巡る役目を果たす[50]。そして、今年の7月に程南村の現地調査でも、同様の現象が確認された。程南村では毎年の三山国王の祭祀儀礼で、主神としての三山国王は外出巡査の神像を持っているものの、村の行列に従って村全体を巡ることはなく、その役目は自分の部下の三官人爺が果たしている。なぜ高位に位置する国王が村の巡査の権利を持たず、逆に下位の神が中心となるのか。このような現象が起こった原因は恐らく、三山国王が生まれてから1400年の間、地域の住民が三山国王を人間の皇帝の投影として位置づけた可能性が考えられる。

中国の各派の学説では、有能な君主とは何かについて論じており、『管子』の「君臣編」の中には有能な君主がどうすべきかを以下のように論述している。

「是故有道之君、正其德以莅民、而不言智能聡明。智能聡明者、下之職也；所以用智能聡明者、上之道也(このゆえに、有道の君は、其の徳は正しくして以(も)って民に莅(のぞ)み、而して智能聡明をいはず。智能聡明は、下の職なり。智能聡明を用いる所以の者は、上(かみ)の道なり)」[51]。

つまり、有能な君主は常に自分の道徳を正して臣民を導くもので、知能や聡明さを重視しない。知能や聡明さは、臣下の役割として求められる。臣下の知恵を利用するこそが君主の道である。

また、『荘子』によれば、「上無為也、下亦無為也、是下與上同德、下與上同德則不臣；下有為也、上亦有為也、是上與下同道、上與下同道則不主。上必无為而用天下，下必有為為天下用，此不易之道也。故古之王天下者、知雖落天地、不自慮也；辯雖雕萬物、不自說也；能雖窮海內、不自為也。天不產而萬物化、地不長而萬物育、帝王無為而天下功(ただ、上に立つ君が無為で、下に在る者もまた無為であれば、下が上と同じ特性を持つことになってしまい、下が上と同じ特性を持つようになれば、もはや臣下ではなくなってしまう。他方、下にある者が有為で、上もまた有為であれば、上が下と同じ道を行なうことになり、上が下と同じ道を行なうようになれば、もはや君主ではなくなってしまう。上に立つ君主は必ず無為の道によって天下を動かし、下に在る者は必ず有為の道によって天下のためにはたらく、これこそ常に変わらぬ道なのである。だから、古の帝王は天下に君臨するのに、天地を包括するほどの智恵を持っていても、

[50] 貝聞喜2007『潮汕三山国王崇拝』広東人民出版社 p.35-44

[51] 原文は李山・軒新麗2019『管子』中華書局 p.246による。現代語訳は遠藤哲夫1989『管子中』明治書院 p.545を引用。

自ら思慮をめぐらすことはせず、万物をあまぬく動かすほどの弁舌を持ちながら、自ら論議することはなく、四海の内を窮め尽くすほどの才能を擁しながら、自ら行動することはなかった)[52]」。

つまり、皇帝としては、無為を実践するのみで充分であり、全ての事を自らの手でなす必要はない。万が一、事柄を完璧に遂行できるならば何の問題もないが、一旦何らかの誤りが生じれば、臣下たちの前で、皇帝としての威厳を損なう事態に陥る可能性がある。

そして、戦国時代の法家の代表である韓非子も、後世の帝王のために「主道」という文を書いた。

「明君之道、使智者尽其慮、而君因以断事、故君不躬于智；賢者勑其材、君因而任之、故君不躬于能；有功則君有其賢、有過則臣任其罪、故君不躬于名。是故不賢而為賢者師、不智而為智者正。臣有其労、君有其成功、此之謂賢主之經也（明君の道は、智者をして其の慮を尽くさしめて、因(それに依拠順応して)って以って事を断ず、故に君は智(知恵がきわまるとこがない)に窮せず。賢者其の材(才能)を敕め、君因って之を任(任用する)ず、故に君は能に窮せず。功有らば即ち君其の賢を有し、過ち有らば即ち臣其の罪(罪を負う)に任ず、故に君は名(名声が無窮である)に窮せず。是(こ)の故に不賢にして賢者の師と為り、不智にして智者の正と為る。臣は其の労を有(負担し)し、君は其の成功有(享受する)す。此(これ)を之(こ)れ賢主の経というなり)」[53]。

これらの思想は、中国の歴代の統治者への安定的な統治の枠組みを示すだけでなく、三山国王の信仰儀礼にこの思想を導入することで、三山国王が主神として村の巡査になぜ直接関与しないのか、その深層的な理由を理解することができる。

歴代の君主がその支配の位置を確立・維持できた背後には、彼らの持つ皇帝としての威厳が存在している。この威厳の源泉は神秘性にある。神秘的な要素が強調されれば、臣民は皇帝を神聖な存在と見なし、畏怖の感情を持つ。古代の帝王が国政の具体的な事務に直接介入しなかったのと同様に、三山国王も日常の統治業務を「指揮大使」や「木坑公王」、「三官人爺」といった心腹の大臣たちに委ねている。君主としての神秘感を保持し続けることは、絶対的な統治地位の確立と維持に欠かせない。もし三山国王が長期的に直接、各儀礼での巡査を参加するならば、村民と神々の間に生まれる親近感が増し、神秘感は薄れてしまう可能性がある。また、村の長老Ｃ氏（69歳）とＪ氏（64歳）によると「三山国王って、それは国王なんだよ。自分で出巡るなんてあり得ないよ。村の巡査なんて、部下に任せておけばいいさ。国王まで巡査したら、廟は誰が守るか」[54]。つまり、現在村の長老たちは自分の潜在意識の中でも三山国王を王様として認識している。このため、三山国王の代理として「三官人爺」が村を巡査する姿を目の当たりにすることで、村民たちは三山国王の崇高さと不可触の存在を強く意識し、その結果、村民の心において三山国王の影響力と崇拝の度合いが一層強まるのである。

また、明清時代以来、中国の皇権が神権に凌駕しているという認識が人々の心中に根付いていたため、民間信仰は常に皇権の支配を受けており、政府のためにサービスを提供し、その認可を求めていた。そのため、民間では皇権に関連する物事を改変し、民間の神々の姿に置き換えることが行われていた。たとえば、鴻程大廟の内外には皇権を代表する龍の彫像が多数あり、宋の時の国王の称号を続用し、巡察の時に使われる人で扮する軍隊などがあった。村人たちはこれによって、自分たちが信仰する神が最高の地位と権威を持っていることを示そうとしていた。

しかし、このような皇権の模倣は実際には民間が現実の政府を信用していないことを間接的に示してい

---

[52] 原文は郭慶藩1961『荘子』中華書局 p.465による。現代語訳は福永光司・興膳 宏訳2013『荘子外篇』筑摩書房 p.189-190を引用。

[53] 原文は陳秉才2007『韓非子』中華書局 p.10を引用。現代語訳は内山俊彦訳1982『韓非子』学習研究社 p.150による。

[54] 2023年７月31日に実地調査を実施した。
当日、その場には８人の長老がいた。その中で、私がインタビューに同伴として招待した他の６人の長老は全て各家族で尊敬されている人物だが、彼らは発言しなかった。その代わり、最も権威のある２人の長老の発言に対して、他の６人はうなずき、黙認する姿勢を見せた。これは、その地域でこれら２人の長老の意見が一般に受け入れられていることを示している。

る。明清時代において、程南村の村民にとっては、権力を持つものは皇帝ではなく、実際には地元の官府であった。長年の歴史と現実から見れば、饒平県は中央政府に遠く離れていたため、地方の官府では汚職が生まれやすく、それが地域の民生に影響を与えることが常にあった。そのため、官府が正義を代表できず、人々の頼りになる存在として機能しない場合、村民たちは理想化された清廉の官吏や最も権力のある皇帝への希望を通じて、正義への渇望を表現した。そして、これを超自然的な力からの「正義」を追求する宗教信仰として表現し、これが廟内に多数の歴史的な忠臣の彫像が存在する背景の一因となっている。そのため、彼らは自らの希望を表現することを選び、官僚たちとの直接の対話を避ける傾向があった。このような背景から、民間信仰は自然とその役割を果たすようになり、民間の信仰は村民の心の支えや彼らを保護する盾となった。

まとめ

本論文では、潮汕地域における饒平県の鴻程大廟を中心に、これまでの廟に関する歴史および現地調査から得た資料を基に、廟内の形式、三山国王の従属神、儀礼などの形成の原因を研究した。

第１章では、鴻程大廟の自然環境と文化環境、及び鴻程大廟の歴史、廟外の建築形式、そして廟内の各種神像について考察した。鴻程大廟はこの700百年間単に三山国王信仰を祀る廟として存在しているだけではなく、宋の末期には元軍に抗する蜂起の地の一つであり、明代には人材を育成する場所でもあった。そして、今日では中国大陸と台湾の間の友好的な交流の橋渡し役を担っていることがわかった。また、廟の全体の実地調査と歴史文献から得た資料に基づき、鴻程大廟の建築形式は700年以上経過した今でも明の時代とほぼ同じ配置を保持していることもわかった。そして内部に祀られている様々な道教の神々、民間の神々および仏教などの要素から見ると、当地の人々がさまざまな民間信仰や宗教に対して非常に包容的であることが見て取れる。しかし、各種の信仰の融合は実際には地元の人々の自然環境に対する恐怖心と実利的な信仰心にも関連していると考える。

第２章では鴻程大廟で行われる一年間の各種の儀礼について考察した。近年廟内に新たに追加された神籤を分析することで、これらの神籤が時代の変化に伴い絶えず更新され、地元住民の生活ニーズに適応していることがわかる。さらに、毎年の儀礼を行う際、村民たちは異なる年齢層に基づいて一つの完全な整体を形成している。現在、中国の農村の人口過疎化が進む背景の下で、このような儀礼は地元の人々にとって、村全体の結束を強化することができ、三山国王への信仰の尊敬も深めている。

また、第３章では、第１、２章の考察から、この廟が建築の全体的な結構や神々の位置づけにおいて、儒教思想と密接な関係があることを述べた。

鴻程大廟の内外を詳細に調査した後、筆者は廟の外観の建築様式から内部の神像の種類、主神の座席配置に至るまで、どれも濃厚な儒教文化の影響を示していることを発見した。関連する歴史文献『東里志』からみると、この廟は明の正徳庚午年（1510年）に一度の大規模な再築作業が行われたことが明らかになった。この建築を再築する一つ重要な原因は正徳年間に起こった「毀淫祠」事件と直接関連があると考えている。明代には、三山国王は宋のように国家公式の祭祀対象とはならず、その神格の地位はある程度あいまいになっていた。したがって、この敏感な時期に再建を行い、そして儒教の要素を強調することは、政府の立場に近づくためのものであった可能性が大きい。さらに、現存する扁額や対句からみるとは、「忠君愛国」の思想が表明されており、地元の士大夫と程南村の民衆が三山国王の正統性を政府に証明しようと努力していることがわかる。これらの行為はいずれも三山国王を民間の異端な神々と区別するためである。

さらに、明清時代には皇帝の権力がすべてに凌駕すると一般に考えられたため、民間信仰はしばしば皇権の強い影響を受けていた。このような背景の下で、三山国王の信仰儀礼のある特徴は、皇権の模倣と見

なすことができる。さらに本章では、歴史文献と地元の長老との会話を通じて、三山国王信仰と皇権との関連性をさらに論じた。古代の君主は無為を実践し、国の日常の政務に介入せず、自分の知恵と能力を通じて間接的に治理に影響を与えるべきであるとされていた。この考え方は、三山国王の信仰の儀礼の中にも反映されており、三山国王が主神であっても直接巡察に参加せず、部下の「三官人爺」を通じて国王としての影響力を実現している。

以上の３章を通して、鴻程大廟に関する廟の内外の建築物形式、神像の座席分布および廟に関する儀礼の形成原因を明らかにした。しかし、台湾の三山国王信仰との比較を行うためには、単に鴻程大廟を調査するだけでは不十分であると考えられる。そのため、筆者は今後の研究計画として、三山国王の祖廟および潮汕地域における台湾に関連する三山国王廟、さらに台湾本土の三山国王廟を中心に詳細な調査と比較分析を行いたいと考えている。これにより、両地域における三山国王信仰の相違点と共通点の原因を明らかにし、より深い理解を得ることを目指している。

参考文献

・日本語
内山俊彦訳1982『韓非子』学習研究社
遠藤哲夫1989『管子中』明治書院
小島 毅1991「正祠と淫祠―福建の地方志における記述と論理」『東洋文化研究所紀要』
杉本達夫訳1964『荀子』経営思潮研究会
森 秀樹訳1986『荀子下』学習研究社
福永光司・興膳 宏訳2013『荘子外篇』筑摩書房
・中国語
貝聞喜2007『潮汕三山国王崇拝』広東人民出版社
陳春声1994「社神崇拝与社区地城関係―樟林三山国王的研究」『中山大学史学集刊・第二輯』広東人民出版社
陳天資2001『東里志』饒平県地方志編纂委員会弁公室
陳秉才2007『韓非子』中華書局
方勇2015『荀子』中華書局
郭慶藩1961『荘子』中華書局
簡瑛欣2010「馬来西亜与中国台湾三山国王廟的比較研究」『広西民族大学学報』第32巻第３期
李山・軒新麗2019『管子』中華書局
劉錫弘2014「宜蘭彰化三山国王信仰之比較研究」台湾文化研究所　修士論文
劉忭1883「饒平県志―巻十三災祥」劉忭原本、恵登甲、黄德容、翁荃増編『広東府県志輯』上海書店・巴蜀書社・江蘇古籍出版社
邱栄裕2008「論述客家“三山国王”民間信仰之変遷―以台湾宜蘭地区為例」『贛南師範范学院学報』第２期
饒平県地方志編纂委員会2010『饒平県志（1979～2005)』広東人民出版社
魏校1983『荘渠遺書』商務印書館
許嘉明1973「彰化平原福佬的地域組織」『中央研究院民族学研究所集刊・第36期』